

# 益田隆研究

## 日本洋舞史の一側面

西浦 義夫

益田隆は戦前戦後を通じショーやレビューの世界を中心に活躍した舞踊家であるが、彼の舞踊は単なるショーダンスではなくモダンダンス、日本舞踊、スペイン舞踊を中心とした民族舞踊等に裏づけられたものであり、大衆に愛される舞踊をモットーとし、難解な芸術より、楽しめる舞踊を前面に打ち出したものである。

### 1. 高田舞踊団

益田隆は明治43年2月3日、東京・青山に生まれ、大正13年高田雅夫の門下となり、舞踊家としてのスタートを切る。ここで彼の師高田雅夫に就いて少し触れておく。高田雅夫は明治28年鹿児島で生まれ、大正2年帝劇歌劇部二期生となり、そこでローシーに師事する。しかし、その帝劇歌劇部も大正5年には解散となり浅草オペラ等で活躍する事になる。高田は大正8年原せい子と結婚し、夫妻は大正11年から13年にかけて欧米に外遊する。その間ニューヨークでは伊藤道郎と会ったり、カーネギーホールではダンカンの踊りを見て感激したり、高田に強い影響を与えたデニションとの交友等がある。帰国後研究所を開設するがそこへ入門したのが益田隆である。

高田雅夫は舞踊の基礎をローシーに学び、舞踊の持つ大衆性をデニションからくみとったと言って良いだろう。そして高田雅夫の門下からは芸術性を主体としたモダンダンスを江口隆哉が、大衆性に重きを置いた舞踊を益田隆が引き継いだとも言えるのではないだろうか。そして高田雅夫は昭和5年35才の若さで死去する。

### 2. SKDとNDT

昭和3年益田隆は師の高田夫妻と、高田舞踊団在籍のまま松竹に入社し、発足したSKDと関係を持つ事になる。昭和5年には高田雅夫が死去した事もあって高田舞踊団は退団し、レビューの振り付け、指導に専念する。

SKDは、浅草松竹座のアトラクションとして昭和3年発足。それ以前大阪では、大正12年、OSKが設立されており、昭和3年浅草松竹座でOSKと合同公演が持たれ、それが益田隆のデビューでもある。翌昭和4年、SKD初の単独公演があり、高田せい子振り付「松竹座フォリーズ」、第1景・鏡Aで益田隆はニグロダンスを踊っている。昭和10年松竹を退社し、東宝へ入社する。

その頃東宝では、秦豊吉陣頭指揮のもとに、日

本劇場専属の舞踊団として日劇ダンシングチームが創設される。そこへ益田隆は洋舞のスタッフとして迎えられ、NDTの養成と共に、彼自身も舞台に立つ。中でも伊藤道郎演出、振り付の「プリンスイゴール」の隊長役は朝日新聞の評でも好評であった。作品としては日劇一連の民族舞踊のうち「日向」を担当したり「スポーツレビュー」、「健康美ショー」、「都会の健康美」と言ったスポーツをテーマとしたものや、昭和16年には、東宝国民劇第一回公演「エノケン竜宮へ行く」の振り付け及び出演がある。

### 3. 益田トリオ

以上の様に益田隆はレビュー界で活躍すると同時に当時洋舞界でも注目された益田トリオの公演にも熱意を注ぐ。

昭和9年6月彼は東勇作、梅園竜子と益田トリオを結成する。トリオは8回の公演を持つが次に昭和9年6月、朝日講堂で公演されたプログラムの一部を紹介する。

1. 律動の短詩
2. 三つのソロ  
アレグロバロ (バルトーク) 東  
二の感情 (プーランク) 梅園  
樹の精 (ドビッシイ) 益田
3. 漂流者 (田代与志) トリオ

昭和10年9月には日劇アトラクションとして益田トリオの公演を持ったりしており、益田トリオは批評家の評判も良く大衆にも人気があった。

### 4. 戦中・戦後の活躍

昭和15年9月NDTは東宝舞踊隊と改称され満州、中支、北支、南支各地を慰問巡演するが、益田隆も副団長としてそれに参加する。

やがて終戦となり、新京ではオペラの斉田愛子等と駐留軍慰問で「唄うカルメン・踊るホセ」を公演し、昭和21年11月帰国。

帰国後は、東宝の舞台を中心に活躍する。

その初仕事としては、秦豊吉が新宿の帝都座で行ったボードビルショーに主任出演者として迎えられた。又短期間ではあるがムーランルージュにも出演したが主として日劇を中心に活躍する。

益田隆舞踊団海外公演としては、昭和27年には、ブラジル公演、フィリピン公演を昭和30年に行っている。

又昭和26年ピカソ展を記念して「生きる悦び」を日比谷公会堂で公演。

昭和50年11月には舞踊生活50周年記念公演を日劇で持った。

以上彼の歩んで来た道をたどってみたが、益田隆は日本洋舞史の中でも貴重なパーソナリティを持った舞踊家と言えよう。 以上